

キャンパス移転時の思い出

元学長 名誉教授 喜多村一夫

本学は、戦後間もなく、市の中心部に近い長良川河畔に設立されました。50周年はここで迎えましたが、その直後、現在の場所に移転することになりました。

このほど、本年度の紀要（創立70周年記念特集号）に、思い出やエピソード等の、本学に関する寄稿を依頼する手紙を受け取りました。私は、たまたま、50周年を迎えた時を含め現在のキャンパスに移転して再出発する1年前まで、学長を務めていましたので、当時のことを二、三紹介したいと思います。

移転先は、市が中学校用地として所有していた土地で、休日は野球等に使用されていました。そこで、移転後もそのままの状態に残すことになり、本学は、キャンパスの入り口がバックネットのあるグラウンドになっています。

新キャンパスは市の西部にあり、バスの運行回数が少なく、通学の足が問題になりました。そこで通学時間帯に、岐阜駅前から学生専用バスが運転されることになり、キャンパスに市営バスの乗り場ができました。

また校舎は、従来の大学のそれとは違った新しい感覚のものになりました。エレベーター、図書館、教室、会議室等のある中心棟から実験・実習棟と研究室棟が放射状に出た形になっています。図書館には、学内以外に学外から直接入れる入口が併設され、またコンピューター教室には、最新の設備が入りました。

本学には、英文、食物栄養、被服の3学科がありましたが、被服学科は、生活デザイン学科に改称することになりました。またその定員の一部を使って、全学共通の科目を担当する教員職を主体とした新学科を設立することになりました。新学科の名称について、人間文化学科などの意見もありましたが、最後は国際文化学科に決まりました。

毎年発行される紀要からも、学科の改組に伴って、教育、研究領域が拡大充実していく様子が伺われます。

終わりに、本学が今後益々発展していくことを祈念しペンを置くことにいたします。